週刊
世界と日本
昭和47年4月10日創刊
発行所 ©㈱内外ニュース
東京都千代田区永田町2−17−17
〒100−0014 電話(03)3580−1264㈹
FAX(03)3508−1070
E-mail:tokyo@naigainews.jp
URL https://www.naigainews.jp/
発行・編集人
紺田康夫
月曜日(第1・3)発行
購読料送料とも前納16,500円(消費税込)
郵便振替口座 00190−7−54604

「福澤とジャーナリズム―脱亜論への道」

拓殖大学顧問 渡辺利夫

日本の新聞ジャーナリズムは、明治の前半期、自由民権運動の広がりとともに勃興期を迎えた。しかし、ほとんどの新聞が政党色を帯び、政党機関紙のごときものであった。しかし、その中にあって、福澤諭吉の創刊した『時事新報』は、いかにも在野の言論人・福澤のものらしく、「不偏不党」を編集の主眼とし、執筆・経営陣も福澤を中心として中上川彦次郎、牛場卓蔵、石河幹明らの門下生の俊秀に支えられて刊行がつづけられた。

『時事新報』については調べてみると、大抵がこのように解説されている。間違いではないが、筆者にはこの新聞の主眼が「不偏不党」であったとはにわかには信じられない。掲載された論説のほとんどは福澤自身の手になる。その圧倒的多数は朝鮮問題に焦点が当てられ、それらは朝鮮の政情に対する福澤の憤懣をあらわにしたものであり、朝鮮開化派に対する支援の必要性を訴えたものばかりである。ただ筆を執っていたばかりではない。

福澤は門下生の牛場卓蔵と井上角五郎の二人を朝鮮に派し、朝鮮政府に対し彼らを諸改革の顧問にするよう要求した。牛場への激励文「牛場卓蔵君朝鮮へ行く」が『時事新報』（明治11年1月11～13日付）に掲載された。朝鮮改革への福澤の固い決意と、この決意を牛場に託した福澤の深々とした思いがつづられている。

「行て彼の開進の率先者と為り、その士人の俊英なる者を友としてその頑陋なる者を説き、之を激して之を怒らしめず、之を諭して之を辱しめず、君の平生処世の技倆と学問の実力を以て、懇々之に近づき諄々之を教ゆることあらば、之を開明に入る、亦難きに非ず。或はその際に事の挙らずして堪え難きこともあらんと雖ども、我蘭学の先人が百余年前に辛苦したる有様を想えば驚くに足らず。……君も亦朝鮮国に在て全く私心を去り、猥に彼の政事に喙を容れず、猥に彼の習慣を壊るを求めずして、唯一貫の目的は君の平生学び得たる洋学の旨を伝て、彼の上流の士人をして自から発明せしむるに在るのみ」

福澤がどうしてここまで朝鮮問題に深い関心を寄せたのか、門下の言論人の竹越與三郎はあるエッセイのなかで福澤は朝鮮に恋をしていたと述べている。

「渠が胸中の政治的熱気は、決して初より抑ゆるべからずして、遂に朝鮮経略の上に漲がれたり。実に朝鮮は渠が最初の政治的恋愛にして、最後の政治的恋愛なりと云うを得べし」

当時、深刻の度を深めていた李朝末期の朝鮮の政治改革を求める開化派官僚が、福澤の教えを乞いに三田の慶應義塾を次々と訪れた。福澤は、自分の過去の苦悩を彼らの中に見出し、少なくとも自分を頼ってくる朝鮮人には、救いの手を差し伸べることは自分の責だと感じた。福澤は、かつて幕臣であったものの、明治維新という大業には参加することなく、傍観者としてやり過ごした。このことを深く悔やんでいたのにちがいない。そのために、みずからの思想の新しい実現の場をどこかに求めており、その場が朝鮮となったのであろうと筆者はみている。

『時事新報』創刊号（慶應義塾図書館蔵）

開化派が朝鮮で、後に甲申事変と呼ばれるクーデターを起こし、これは結局のところ無惨な失敗に終わったものの、開化派への福澤の支援は生半なものではなかった。福澤は朝鮮に派遣されていた井上角五郎、開化派のリーダー金玉均との三者間でモールス信号で連絡し合い、またクーデターに備えて数十口の日本刀を井上のもとに送ったという記述がある。

甲申事変は守旧派と清国からの援軍の反撃によって「三日天下」に終わった。甲申事変の首謀者は朝鮮政府によって残酷刑に処せられた。このことを伝え聞いた福澤の心は憤怒に満たされ、『時事新報』（明治18年2月23日、28日付）の論説として「朝鮮独立党の処刑」を掲載。「人間娑婆世界の地獄」が京城に出現、朝鮮は野蛮などというレベルをはるかに超えた「妖魔悪鬼の國」と化し、その残忍なありさまは「寒心戦慄」するものだと朝鮮を難じた。さらに、福澤はこの処刑に直接手を下した者は確かに朝鮮守旧派官僚だが、首謀者の処刑を指揮した者はまぎれもなく清国官僚だと主張したのである。

「朝鮮独立党の處刑」を書いた日から20日後の『時事新報』において、福澤が激憤の感情をそのままに一気に認めたものが、かの「脱亜論」である。この「脱亜論」で語られる「支那朝鮮」こそ現在の東アジアに他ならない。日本を取り巻く東アジア情勢のきわどさをいかにもと思わせる筆致で描写した論説が「脱亜論」である。言葉遣いの激越さに惑わされることなく、福澤「脱亜論」の真意をいまこそ深く読み取りたいと思うのである。

参照：渡辺利夫著
『新脱亜論』文春新書

目次
2面 身近に起きている見えざる侵略から日本を護れ……平井宏治
3面 寺田寅彦「天災と国防」の警鐘から学ぶ……濱口和久
4面 マスメディア批判……千野境子
4面 マスメディア批判……岡田 晃

《わたなべ・としお》 1939年6月甲府市生まれ。慶応義塾大学、同大学院修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学総長を経て現職。オイスカ会長。外務大臣表彰。正論大賞。著書は『成長のアジア 停滞のアジア』（吉野作造賞）、『開発経済学』（大平正芳記念賞）、『西太平洋の時代』（アジア太平洋大賞）、『神経症の時代』（開高健賞正賞）、『台湾を築いた明治の日本人』、『後藤新平の台湾―人類もまた生物の一つなり』など多数。